

「終わる」と「続く」

―「ブックインとつとり」と「読む会」

岩田 直樹（再解釈本舗・「読む会」講師）

一九八八年（私が就職した年）、「ブックインとつとり・地方出版文化賞」と「読む会」は始まった。「地方出版文化功労賞」審査は二〇〇四年、「読む会」は一九九四年から関わっている。今年でそれぞれ二二年目、三二年目である。人の一生にとって決して短い時間ではない。

『音信不通』二月号が定有堂ホームページに掲載されているときには、「ブックインとつとり」は三八年の歴史に幕を下ろしている。一月三十一日（土）に地方出版文化功労賞の表彰式・受賞記念講演が行われ、それをもって多くの関係者のボランティア精神に支えられて地方出版文化を奨励・激励し続けてきた全国唯一の賞がなくなるのである。

「ブックインとつとり」とは何か。三〇周年のパンフレットにはこうある。「地方文化のバロメータのひとつとも言われる、地方での出版活動の重要性に目を向けたブックインとつとり実行委員会では、一九八七年鳥取県で開催されたブックインとつとり87「日本の出版文化展」いわゆる「本の国体」を機に「ブックインとつとり・地方出版文化功

労賞」を制定した。以来三〇年に亘って、地方と地方そして人と文化の交流を積み重ねてきた。その結果今日では、地方出版への激励や奨励として貢献してきたことが全国から高く評価されている。」（さらに詳しく知りたい方は二〇一七年一月の「今月読んだ本」第一八六回を参照していただきたい。）

毎年上半期、約一〇人の審査員が一〇冊前後の候補作を一ヶ月かけて読む。東京と鳥取県以外で出版された本が対象であり、昼間は仕事をしながら審査本を読み続けるのはひと苦労だ。審査の原動力は、地方出版を顕彰して地域の文化を少しでも豊かにしたいという強い思いである。

過去の功労賞では、アカデミー賞外国語映画賞（二〇〇九年）の映画「おくりびと」の原作である青木新門『納棺夫日記』（第七回、富山・桂書房、一九九三年）、平凡社ライブラリーのロングセラー渡辺京三『逝きし世の面影』（第二二回、福岡・葦書房、一九九八年）などが有名だ。私が審査員になってからは、地を這うような緻密な取材で定評のある渡辺一史の『北の無人駅から』（第二六回、北海道新聞社、二〇一一年）が最も印象に残っている。乗り鉄が書いた秘境駅の話だと思われそうだが、駅の背後にある人々の生活、歴史（開拓史）などを克明に描いた生活誌、民衆史の名著である。

私が審査するのは毎年一月か二月だった。どんな本に出会えるのか楽しみにしていたものだ。そのルーティーンがなくなるのはとても淋しい。現在、一人出版社や一人書店が増えているという。故長嶋茂雄氏の言葉を借りて「地方出版文化は永久に不滅です」と叫びたい気持ちである。

「終わる」ものがあれば「続く」ものもある。

三年前の四月、定有堂書店が閉店した。店舗は終わったが「読む会」は続いている。閉店の二ヶ月後、鳥取県立図書館で「定有堂「読む会」フォーラム」が開催された。タイトルは「定有堂書店「読む会」の展開―街の読書運動の可能性」。詳しくは、定有堂ホームページ掲載の奈良さんの講演「定有堂の生成変化」、私の「今月読んだ本」第二二九・二三〇回をご覧ください。

「読む会」は鳥取西高校の名物教師（日本史）であった濱崎洋三先生（一九三六―一九九六）と奈良さんの出会いから始まった。

一年八組で行われた最後の授業「伝えたいこと」は今でも鮮明に覚えている。約百人の教え子たちは教室に入りきらずに廊下にあふれていた。参加した誰もが先生の言葉を一言も聞き漏らさまいとしていた。七〇分の授業を終えた先生は「途中で痛みが消えてな、この調子なら冬季補習授業もやってみようか」とおっしゃっていた。一ヶ月後に他界されたとき、「あんなに

お元気そうだったのに」と言葉を失った記憶がある。

一九八八年当初は「岩波新書を読む会」だった。いつの頃から「読む会」となり、哲学・思想・歴史・社会などを扱った新書、文庫を中心に毎月読んでいた。開催は四五〇回を超えているはずだが、なぜか近年は第〇〇〇回「読む会」と言わなくなった。「こんなに続いているんだ！」と開催回数にこだわっていた私も、いつからか数えることをしなくなっている。

毎回一〇人前後の参加がある。メンバーは転勤、卒業で入れ替わることもある。「読む会」は堅苦しい勉強会とはほど遠い。①参加は自由、②課題本を読んでこなくてもいい、③他人の意見を否定しない、④課題本をリスpekトする、⑤雑談やおしゃべりはOK、という「ゆるい会」である。この「ゆるさ」が「続く」要因の一つかもしれない。

二〇二六年は「戦後八〇年を超えて」「哲学・思想・歴史」「社会」の三つのテーマで、琉球処分、内務省、日本終戦史、世界哲学史、コミンテルン、ユダヤ人の歴史、在野と独学の思想家・研究者、ケア、日本語、建築などの本を読む。興味のある本を扱うときだけでもよいので、気軽に参加していただきたい（日時などはホームページ参照）。

